池内 紀

ちょん髷とネクタイ

時代小説を楽しむ

新潮社

池内 紀

ちょん髷とネクタイ

時代小説を楽しむ

ちょん髷とネクタイ
時代小説を楽しむ
二〇〇一年一一月二五日　発行

著　者　池内紀
発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（03）三二六六—五四一一
　　読者係（03）三二六六—五一一一
郵便番号一六二—八七一一
印刷所／大日本印刷株式会社
製本所／大口製本印刷株式会社
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

© Osamu Ikeuchi 2001, Printed in Japan
ISBN4-10-375503-2　C0095

目次

Ⅰ

藤沢周平を持って豊島園に行こう　9

池波正太郎を開いてバブル経済を考えよう　27

柴田錬三郎の「眠狂四郎」とともにテレビ時代がやってきた　47

有吉佐和子と「婦女訓」を読み直そう　67

五味康祐の「柳生武芸帳」は情報戦争の見本帳である　85

Ⅱ

三遊亭円朝といっしょに「真景累ヶ淵」を歩いてみよう　107

中里介山が見た「大菩薩峠」の見晴らし　125

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

白井喬二と「富士に立つ影」を眺めよう　141

Ⅲ

海音寺潮五郎によって「男」をもっとよく知ろう　155

山本周五郎と「はにかむ」　175

松本清張とともに金の山にもぐりこむ　191

司馬遼太郎「幻のデビュー作」と「張り扇」　209

あとがき　228

装画　柴田ゆう
装幀　新潮社装幀室

ちょん髷とネクタイ　時代小説を楽しむ

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

藤沢周平を持って豊島園に行こう

私鉄で池袋を出て練馬で乗り換えると、ほんのひと駅だ。すぐ目の前が豊島園で、広い改札口が遊園地の入口と向かいあっている。週日でも日曜日のような雰囲気があって、少し古風な看板が何やらなつかしい。

右手にこぼれ出て小さな商店の並びをすぎると、もの静かな住宅地に入っていく。こちらにもまたどこかしら古風な雰囲気がある。家のつくりは新しいのに、辺りのたたずまいがひっそりと落ち着いている。生け垣がこんもり繁っていて、うしろから庭木がかぶさるようにのびている。生け垣も庭木もなかなかの古木であって、昨日今日ひらかれた土地でないことがみてとれる。シャレたプレハブの住宅と軒を接して、どっしりとした瓦屋根の二階家がある。縁側がガラス戸で、その奥に白い障子がのぞいている。

「城南住宅組合案内図」

小さな区割りのなかに、ぎっしりと住人の名前が書きこんである。おなじみの住居標示板だが、

突然、「城南」といった城下町のような名前と対面して、ついとまどってしまうのだ。どうして城南なのだろう？　城の南というからには城がなくてはならないが、練馬大根で知られた土地柄である。だだっぴろい大根畑がひろがっていたようなところであって、「城南」といった名前からもっとも遠い。それともかつて豊島城といったものがあったのだろうか。豊島氏という豪族がいて、武蔵野のはずれに砦を築き、それが豊島城の名で遺構がたしかめられている――。

そんなことを思いながら歩いていく。かりに豊島城があったとしても、それは江戸の前の、そのまた前の中世といった時代のことであったはずだ。たしかにそのころ武蔵七党などとよばれる豪族がいて、関東の各地に本拠を構えていた。しかし、どうしてそんな由来をたどってまで「城南」の名を選んだのだろう。豊島園といった大遊園地があることからもわかるように、もともと何もない台地であって、住宅地を名づけるのに困ったせいなのか。それとも、ここをひらいた人が、どうしても城にちなんで命名したいと思ったのだろうか。

きちんと碁盤目のかたちをしていて、そこから一歩でも出ると家並みがガラリと変わる。通りがねじくれ、住宅がてんで勝手な方向をむいている。踵を返して道をもどると、またもや整然とした碁盤目の中にいる。「城南住宅」をつくった人々は、あきらかにここを城下にみたてて区分けした。ちょうど城下町に大工町や山伏町や桶屋町や同心町があるように、町づくりにあたり、きちんとナワバリを引いた。ナワバリを引くためには、たとえ中世の遺構であれ、一つの城がなくてはならぬ。

もの静かな通りをタテ横に往ったり来たりしていると、やがて気がつくのだが、生け垣に一定

の形がある。木の種類、また配置ぐあいが似ているのだ。あちこちに手が入り、住居の増改築で変わってしまったが、つくられた当時は、もっと似通った姿を見せていたにちがいない。ブロックや石積みではなく生木で囲い、その木はひいらぎ、ひば、つげ、あおき。家ごとに少しずつ違うが、何軒かに一軒は、ほぼ同じ木が、同じように枝をのばしている。ハゼの木であって、かつてはハゼの実から蠟を採った。ウルシの実より質が良いので珍重された。

奥まった一画に三軒ばかり、昔ながらの家がのこっている。瓦屋根、引き廻しの縁側、生け垣と庭木。生け垣ごしに小さな菜園がのぞいている。白菜が植わっていて、当主らしい老人がしゃがんで草むしりをしている。そのまま藤沢周平の世界である。

小説ではしばしば海坂藩となっている。藤沢周平の故里、羽州鶴岡・庄内藩がモデルになっている。あるいはお隣りの米沢藩、上杉家のお城下。そこの下級武士の暮らし。住居にしても長篇では描写がくわしい。ためしに一つ。

「普請組の組屋敷は、三十石以下の軽輩が固まっているので建物自体は小さいが、場所が城下のはずれにあるせいか屋敷だけはそれぞれに二百五十坪から三百坪ほどもあり、菜園をつくってもあまるほどに広い。そして隣家との境、家家の裏手には欅や楢、かえで、朴の木、杉、すももなどの立木が雑然と立ち、欅や楢が葉を落とす冬の間は何ほどの木でもないと思うのに、夏は鬱蒼とした木立に変わって、生け垣の先の隣家の様子も見えなくなる」

（「蟬しぐれ」）

短篇では短く切りあげた語りで入る。

「坂は、ゆっくりした勾配で、下の雀町の屋並みに消えている」

（「冤罪」）

崖下に十石どまりの小禄の家が集まっていた。どれも町はずれの足軽町の長屋と大差ないつくりだが、ただ足軽長屋とちがって庭だけはゆったりしていて、そこに畑をつくっている。

十石どまり。米が規準のサラリーは想像がつかないのだが、おそろしく薄給だったことはよくわかる。一人扶持三石とか六石が下級役人の標準だった。さらに下がると、石ではなく三俵七斗と、いたってこまかい。そんな捨て扶持で、いったいどうして暮らせというのか。

現金は極力つかわない。なるたけ自給自足をする。しかし農民のように農地があるわけではないので、わが家の庭を耕す。「冤罪」の主人公源次郎は、兄の家に居候の身であるが、その兄は禄高二十七石とある。ただし、藩の財政が逼迫（ひっぱく）しているおりから、藩に十石貸している。返してもらえる見込みはまるきりないから実質十七石だ。「子供たちが着るものも丹念に継ぎをあて、喰べものも、庭の隅に作った畑で夏の間の青物などはほとんど間に合わせる」。

俸給とりの兄は二十年余、雨の日も風の日も城に通いつづけてきたが、その間、二十七石の家禄は、米一俵もふえることがなかった。

生け垣、庭木は飾りや観賞用ではない。欅や楢は家屋の修理の際の用材になる。朴の木から下駄がつくれる。すももや柿は貴重な食べ物を実らせてくれる。庄内藩の家老酒井調良（ちょうりょう）は、みずから率先してリンゴの栽培をした。柿のシブ抜き法を研究、タネ無し柿に成功した。いまにつたわる庄内柿であって、別名が調良柿。

名君として聞こえる上杉鷹山はさまざまな改革をしたが、とりわけ大きな業績は「国産之品之成就」だった。米沢藩の産業をおこした。その治世を回顧した「聿修篇」といった本には「漆植立に御心を凝らし給ひし事」として語られている。山々、空地、庭に、くまなく漆の木を植えさせた。実がなると、それを藩が買い上げる。そのために木の実蔵役を置いた。漆の専門職であって、栽培、育成の相談にものる。「古法を以て木ノミ代銀ハ正金ニあらず手形と唱ひ紙切ニて御渡しくだされ……」

名君といえども払いはなかなか渋かったようである。古い習わしと称して証券で渡す。受けとった方はその「紙切」を代替商にもちこんだ。現金にはなるが、けっこうな手数料を差っ引かれた。

「このところ西国はぜ蠟ますます盛んに相なり、江戸表において此方の御蔵蠟以外あい求め候につき……」

ハゼの木の実による蠟のことが米沢にもつたわっていたらしい。漆よりも良質の蠟がとれる。いずれハゼ蠟におされて米沢の漆蠟が買いたたかれるのではあるまいか。江戸表より建策がきた。生け垣、庭木にハゼを採用してはいかがなものか。

「米沢藩の窮乏は、中納言景勝が、関ヶ原役のあとで会津百二十万石から米沢三十万石に減封されたときに始まる」

（「幻にあらず」）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com